



# 鳥取県米子市における 「子ども第三の居場所」コミュニティモデル の開設と運営(2年目)

te to te  
～つなぐん家～



## 2023年度事業報告書

一般社団法人 つなぐプロジェクト

Supported by  日本 THE NIPPON  
財団 FOUNDATION



## 1.事業計画

### (1) 【目的】

生き抜く力を育む「子ども第三の居場所」を開設・運営する。  
行政、NPO、市民、企業の方々と協力し、誰一人取り残さない  
地域子育てコミュニティをつくることで、「みんなが、みんな  
の子どもを育てる社会」を目指す。

### (2) 【目標】

- ・ 2024年3月31日までにこの一日平均利用児童数を15名にする
- ・ ボランティア等の地域住民や、行政、学校との関係構築、多世代交流機会の提供
- ・ 子どもの「経験の不足」を解消するような定期的なイベントを事業期間内に3回実施する

### (3) 【事業内容・開設】

- ・ 鳥取県米子市における「子ども第三の居場所」コミュニティモデルの開設(追加工事) 物件現況:企業所有ビル(第35年)
- ・ 取得形態:企業より賃貸借
- ・ 内容:内装工事など
- ・ 施設名称:te to te --つなぐん家~
- ・ 面積:総面積約226m<sup>2</sup>
- ・ 博造:缺骨造3階建
- ・ 施設概要:交流・学習スペース、キッチン、相談室など





- ・ 棚などの追加工事の際、利用者はどんなふうに棚が出来上がっていくのか、大工さんの仕事に興味津々で見学。職人の方々も子ども達の質問に丁寧に受け答えしてくださった。完成した際は、子ども達の感激の声と拍手で盛り上がった。間近で職人の方々の仕事を見る機会が少ない子ども達にとって良い経験となった。





#### (4) 【事業内容・運営】

- ・鳥取県米子市における「子ども第三の居場所」コミュニティモデルの運営
- ・期間:2023年4月1日~2024年3月31日  
(週5日、9時から20時まで開所)
- ・場所:鳥取県米子市
- ・対象:15名(家庭や自身に課題を抱えた小中高生)
- ・内容:子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援することで社会的相続を補完する。

地域の方々と食事を作る経験、企業見学や経済の仕組みなど知る学習体験を通じて、子どもに多様な経験を提供すると同時に自立を目指したサポートを行う。

## 2 事業実績

### (1) 【利用者実績】

登録者 42 名

区分	小学生	中学生	高校生	その他	合計
男児	14	5	2	0	21
女児	16	3	0	2	21
合計	30	8	2	2	42





## (2) 【学習支援・学校連携実績】

- ・午前中は、学校に行けなかったと落ち込んでいたり不安定な状況だったため、体を動かしたり、ストレッチなどを行った。
- ・不安定な子どもは「学習」「勉強」という言葉で逃げ出したり「絵本」を見せるだけで、机の上のものを払い除けたりする状況。昼食後「静かにする時間」として、まずは静かにして椅子に座る、鉛筆の代わりに色鉛筆やクレヨンに持ち替え絵や塗り絵を行った。また、絵本の代わりに折り紙を折るなど、子どもの状況に合わせて対応した。
- ・学習に取り組める子どもは、各教科どこに困り感を持っているのか、どこでつまづいているのかを確認し、復習をしながら一つ一つ理解できるよう進めた。
- ・学校、保護者と相談し対応可能な学校は配布されているChromBookで拠点と教室をつなぎ遠隔学習を行った。授業に参加する事が難しい場合は、帰りの会などにChromBookで遠隔参加。遠隔学習ができない学校は、e-ラーニングにて学習を行った。拠点に先生方が気軽に生徒の様子を観にこられる環境を作り、子どもと学校のつながりが途絶えないよう、関係性を構築することができた。
- ・学習支援体制はできる限りマンツーマンもしくは、一人の支援者に3人までを基本とし、一人一人のスピード、学習困難に合わせたサポートを行い、学校との連携を図り各クラスの進捗状況、その子どもに対する支援計画を確認しながら伴奏支援を行った。





2023年度新学期は、会員全員が学校に登校。  
2023年度中不登校気味で戻ってきた利用者もいるが、遠隔学習や拠点で行ったプリント学習などの提出や拠点の利用・学習状況などを鑑みて、ほとんどの利用者が出席扱いとなった。すべての利用者が学校や担任との関係性が途絶えることはなかった。

2024年3月31日現在、出席扱いとならず完全不登校は2名





### (3) 【生活支援・相談支援】

- ・昼夜逆転など生活リズムがくずれているお子さんに対し、利用者・保護者それぞれと相談時間を設けどこに原因があるのかを一緒に考え一つ一つ問題点を探り、解決策をともに検討し実行。
- ・家庭環境に応じ一人で起きられない、自力で通所ができない子どもに対し、送迎を行い通所につながった。
- ・利用者の伴奏支援と同時に、育児による保護者の鬱状態やネグレクトの家庭など、保護者がいつでも相談できる環境を作り、ストレス軽減のための提案や保護者の伴奏支援を行い、母子関係、生活リズムの改善へとつながった例もある。

### (4) 【学校・地域・行政との関係構築実績】

- ・不登校利用者の所属校とつながるため、先に保護者に拠点の利用状況と拠点とのつながりを作っていただくと同時に、学校と連絡を取り合い、拠点の見学を随時行った。
- ・担任の先生と利用者の問題点について話し合い、同じ方向性で学校と拠点と双方からの伴奏支援を行うことができた。
- ・体調面への不安や発達障害を持つ利用者に対し、病院・理学療法士・学校と連携し、専門職による支援提案のもと、一人一人にあった支援を行った。
- ・要保護児童対策協議会(要対協)対象児童の利用に関して自治体児童相談所、医師と連携し、対応について協議を行い支援体制を整え、伴奏支援を行った。
- ・社会福祉協議会などの協力を得て、地域の方から五月人形やピアノなどを寄贈いただいた事をきっかけに、拠点の活動を知っていただき、食材や絵本など子ども達に必要なものを提供したいと気軽に連絡いただけるようになった。
- ・ロータリークラブ、ライオンズクラブ、商工会議所など地域企業が集う環境で講演を行い、子ども達の現状、拠点の取り組みを紹介し、応援企業を増やした。





- ・自治体の行っている中心市街地活性化事業に取り組んでいる角盤町商店街振興組合と中心市街地活性化の起爆剤として実施されている地ビールフェスタ in 米子 の実行委員会の大きな協力を得て、拠点ブースを設けていただき、寄付活動を実施。地域の方へ子ども達の現状と拠点の取り組みを知っていただく機会を得ていると同時に利用者の社会活動の場も提供いただいた。
- ・鳥取大学医学部の学生ボランティアサークルによる、ボランティア活動（学習・遊びサポート）の場として、協力体制を構築。また、医大生を対象とした勉強会などを開催した。







## (5) 【子ども達の様々な経験】

### ①毎日の経験『食育』

子ども達はその子なりにできる事を率先して手伝うようになった。お箸やお茶の用意、ボランティアの方々に教えていただきながら食事作りの手伝いをする利用者も増えた。後片付けは、全員で行いテーブルや食器を拭くなど最後まで積極的に手伝うようになった。

食事が目の前に提供され、食べられる事が当たり前ではないこと。「食」の始まりから終わりまでを子ども達と一緒に考え、人の手と愛情が積み重なって食することができることを知る環境を整えている。感謝の気持ちを込めて「ありがとうございます。いただきます」がte to te流。地産地消を意識し、ボランティアの方達やスタッフが愛情を込めて手作り。食に手をかければかけるほど、子ども達のお腹も心も満たされ、明日の生きる力へとつながっている。





## ②夏休み合宿 8/25～8/26

- ・夏休み、合宿を行った。利用者は、課題を持つ子どもばかりではなく、課題を持たない子もいる。合宿を企画したのは、家庭内で生きづらさを感じ、色々な形で発散。両親や祖父母を毛嫌いしながらも修学旅行など学校の宿泊イベントに行く事ができない利用者がいて、家庭内だけでなく外に目を向け、社会を知る機会がないだろうかと考えた事がきっかけとなる。

計画を進める中、利用者の課題を持つ子どもの9割が、親と離れて外泊をした経験がないことがわかった。その理由を尋ねると、「お金がないから」「親が怒ってまた叩かれるかもしれない」「家から出るともう家に入れてもらえないかもしれない」「お母さんと一緒じゃないと寝られない」「暴れてしまうかもしれない」など様々な回答があった。利用者同士また、ボランティアの方や地域の方々との交流の中で、時間や経験を共有し「一人ではない仲間がいる」そして、外の世界は広いこと、自分でできる事をみつける、自立するきっかけが必要と考え合宿を開催した。

親御さんへの周知、任意参加ではあるが理解と協力をお願いし会員38名中14名が参加した。参加者は8割が課題を持つ子ども、2割が課題を持たない子どもとなった。不参加の理由は、「親御さんから離れる事の難しさ」「祖父母の家で過ごしている」「部活」などであった。

夕食や入浴は、角盤町商店街振興組合、地元企業、地ビールフェスタin YONAGO実行委員会の協力を経て、地ビールフェスタ会場にte to teブースを設け、寄付活動を行いながら夕食。夕食は、会場にある食のブースで事前に配布したチケットでそれぞれが食べてみたいものを買ってブースで食べた。初めて食べるもの、食べてみたかったもの、利用者は嬉しくて仕方ない





様子だった。子ども同士で「これも食べてみて」と自分の物を分け合い、「美味しい」を共有したり、ボランティアの方にも「ねえこれ食べてみて」と嬉しそうに勧めている様子が印象的だった。これまで、自分の事が精一杯で、分け合ったり、人に勧める行動は、もっと先の未来に見る事ができる光景だろうと思っていたが、目の前で自然に分け合う様子は成長を感じると同時に非常に嬉しいものであった。

入浴では、入り方がわからない、体を自分で洗った事がない、普段一人で入浴しているが洗えていない、外のお風呂に入りに行った事がないなど状況を把握することができた。

大浴場でのマナー、体の洗い方など一つ一つが良い経験となった。入浴後、「これから一人でちゃんとお風呂に入れるよ」と嬉しそうに話してくれたことが印象的だった。

夜は、憧れの枕投げ大会を行った。大人も子どもも真剣勝負。

「これが、友達と過ごせる楽しさなんだね」と話す利用者もいた。朝食では、朝食を家で食べた事がない利用者もあり、「朝ごはんってこういうものなんだあ」と感激している場面も見られた。

この合宿で得た様々な体験は、利用者の心を豊かにした。そして、サポートをした大人は、拠点の活動だけでは知る事ができなかった利用者の現状を深く知る機会となった。今後も拠点の大切な活動として毎年合宿を行う。





### ③米子市公会堂ハッピー☆ハロウィン ハッピーパレード！ 10/28

米子市公会堂が主催するハロウィンパレードに参加し、仮装をして角盤町商店街400mをパレード。「トリック オア トリート」でお菓子をGETした。中学生以上の男の子達は恐竜に！商店街の方々だけでなく、参加している地域の子ども達をはじめ来場者にも大人気であった。恐竜達の人気をきっかけに他の利用者も地域の子どもだけでなく参加者や来場者との交流の機会を得ることができた。





#### ④鳥取市の子ども達と寄付を通して交流 11/8

鳥取市にある久松小学校と寄付を通して交流した。久松小学校は難民の方々に洋服を贈る活動をしている。拠点にも多くの洋服を寄付をいただき、利用者も喜び分け合うことができたが、『自分たちだけじゃなくて他にも困っている子がいるよ』『戦争のニュースを見た時泣いてる子がいたよ』『他に困っている子にも分けてあげたい』と利用者から意見があがった。県外への寄付も考えたが、鳥取市にある久松小学校の子ども達の活動をニュースで知り、同じ県内で西と東の子ども達がつながってくれたら、お互いの子ども達の世界がまた少し広がるかもしれない、そう期待して久松小学校に連絡した。すぐに快諾いただき、同じ思いを持った子ども達の交流する場を得て、誰かを思う気持ちが育まれるきっかけとなった。





## ⑤芋掘り体験会 11/12

地域の方のお声かけで、芋掘り体験会に参加。地域の子も達も参加していて、ふと見ると利用者と地域の子も達が掘り起こした芋の大きさ比べをしたり、どこの学校？などと気軽に会話している様子が見られた。





## ⑥クリスマス会 12/17

2022年11月に開所式を行い、その際「鳥取キッズチャリティークラブ」の子ども達から寄付金を贈呈いただいた事をきっかけに、つながり続け今年度も1年間活動で得た寄付金を贈呈したいとお声がけいただき、クリスマス会を行った。  
鳥取キッズチャリティークラブは子ども達が立ち上げた会でレモネードスタンドなどチャリティー活動を行い、地震災害に遭われた方達やte to teなどへの寄付を行うために活動されている。クリスマス会は子ども達の交流の機会となった。  
2024年は一緒に寄付活動を行う予定。





## ⑦卒業祝い 3/23

利用者の学校卒業祝いを行った。地域ボランティアの方々も食事作りからお手伝いいただき、一緒に祝うことができた。医大生ボランティアサークルも駆けつけ、飾り付けやゲームなど卒業祝いは盛り上がった。多世代の交流の場となると同時に、また、自分達もこうしてお祝いして欲しいと利用者にとって憧れの会となった。







### 3 事業総括

#### (1) 【事業の成果】

米子市中心市街地活性化を目指す地域企業や商店街の方々との活発な交流ができた。この交流により、人が苦手な子ども達が少しずつ地域活動に参加できるようになると同時に子ども達の活動の場が増え、自分を受け入れてくれる人達がいることを知り、自己肯定感の向上へとつながっている。

また、地元企業の有志が集まるロータリークラブ、ライオンズクラブ、角盤町商店街振興組合に参加することで、地域企業や商店街の方々「子ども達のために」の志のもと、居場所の維持・継続のため、寄付活動や講演活動などの協力をしていただき、寄付収入が前年度に比べ1～2割ほど増えた。

不登校だった子ども達は、昨年4月全員学校に戻ることができた。学校生活が辛く戻ってくる子もあったが、学校との関係が途絶えることはなく、学校と拠点を行ったり来たりしつつ、完全不登校者がゼロとなった。こどもを中心に、その子に必要な環境、サポートを学校の先生方と話し合える関係性も構築することができ、子ども達の様子を伺ったり、プリントを持って来られるなど学校の先生が拠点に足を運ばれる回数が増えた。また、te to teにしながら遠隔で教室の授業を受ける事が認められた利用者も増え、出席扱いとする学校も増えた。

#### (2) 【課題と対応案】

子どもの利用が決まる際、実際には同時にパパママサポートを行っているのが現状。子どもの困り感の糸をたどっていくとその保護者の課題に直面するケースも多い。日々保護者とLINEや送迎の際など、声をかけ気軽に相談できる環境ではあるが、保護者の茶話会などを企画し気軽に話せる場を設ける。





学校生活において、保護者と学校の関係性が上手く行っていない、もしくは学校側では課題を認識していない事がわかった。活動の中で、学校と家庭をつなぐクッション的な役割を担う必要性を強く感じ、次年度よりさらにこの取り組みを強化していく。

学校は保護者の申し出がないと動きがとれないのが現状。保護者から拠点のパンフレットなど資料を渡していただき、学校・保護者・te to teの三者面談を希望してもらうこととした。さらに、必要であれば関係機関と連携を行い、子どもを中心に支援計画のもと、サポートを強化していく。

### (3) 【次年度以降の取り組み】

2025年度は自立年度となる。経営の安定を図り子どもや居場所を守るため、利用者数の増加、事業収入の増加が必須。利用者数の増加については、提供するサービス、質の向上を図りつつ、広報活動を見直し広報圏域の拡大を行う。

事業収入にあたっては、地域企業との協力体制の強化と県内外を問わず協力企業を増やす活動を行う。

子ども達の経験不足の解消にあたり、日々の活動の中で日常のささいな事も知らない子どもが多いことに気づいた。経験不足を補うため、より家庭的にまた基本的な生活習慣の重要性を知る機会をつくる。また、保護者同士の交流や拠点同士の交流の機会をつくり、子どもだけでなく保護者の活動の幅を広げていく。

